

令和6年度第2回

札幌市男女共同参画センター運営協議会

会 議 錄

日 時：2025年3月26日（水）午前10時開会  
場 所：札幌エルプラザ公共4施設 2階 会議室3・4

## 1. 開　会

○事務局（盛田主任） 改めまして、本日は、お忙しい中、ご出席をいただきまして、ありがとうございます。

本日、議事に入りますまで進行を務めさせていただきます公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会市民参画課の主任の盛田と申します。よろしくお願ひいたします。

開会に先立ちまして、所管課であります札幌市市民文化局市民生活部男女共同参画室男女共同参画課の青田課長よりご挨拶を頂戴いたします。

青田課長、よろしくお願ひいたします。

○青田男女共同参画課長 皆様、おはようございます。

本日は、年度末のお忙しい中、お集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。ご紹介をいただきました札幌市男女共同参画課の青田でございます。

日頃より、皆様には、札幌市の取り組み、また、札幌市男女共同参画センターの事業にご支援とご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。

私は着任から1年がたちましたが、あっという間でした。この1年、いろいろと勉強させていただく中で、男女共同参画の取り組みは、何かをやったからすぐに効果や成果が表れるものではなく、地道に取り組んでいかなければ、企業や市民のご理解をいただくのが難しい分野だと実感しております。我々札幌市も男女共同参画センターも予算や人員も限られている中でいろいろと工夫しながら事業を推進することが課題だなと思っております。

前回の10月の協議会では、それぞれのお立場から課題やご要望をいろいろと頂戴しました。本日も皆様から忌憚のないご意見をいただけると思っております。皆様のご意見を基に、我々もこのセンターがよりよい施設になるよう協力したいと思っておりますので、本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

## 2. 委員紹介

○事務局（盛田主任） それでは次に、札幌市男女共同参画センター運営協議会委員の皆様に自己紹介を頂戴したいと思います。

皆様には、ご自身の所属、お名前、近況報告をお1人2分程度でいただけますようお願い申し上げます。

それでは、片山委員から反時計回りに自己紹介をお願いいたします。

○片山委員 お久しぶりです。北海道新聞の片山です。皆様、ご無沙汰しております。今はくらし報道部でデスクをしております。

先日、国際女性デーがあり、私も記者として入ったのですけれども、管理職になって、若い記者たちにどうしたいという話を聞くと、SRHRという性と生殖に関する健康と権利というものをやりたいと言ってくれて、20代と30代の女性記者2人が、東京やいろいろなところにいる専門家に取材し、自分たちの妊娠する権利、中絶する権利、男性の課

題など、いろいろなことを調べており、すごく頼もしいなと思っております。ジェンダーのバックラッシュがトランプ政権になってありますけど、そういった思いを紡いでいきたいと思った今日この頃です。

○中園委員 北海学園大学の中園です。今月初めに咳喘息が出てしまいしまして、声の調子がいまいちです。

大学では、無事、卒業生を3月20日に送り出し、入試も終わりました。経済学部は、本当に理由はよく分からぬのですけれども、受験者が増えており、よかつたかなという感じです。私は北海学園大学のセクハラ相談対応をやっているのですけれども、年明けに、ご存じの方も多いと思いますけれども、一般社団法人にじいろほっかいどうの方に来ていただきて、大学でLGBTQの学生の相談受付をどうやっていくかという講演会をやっていただきました。本当に遅ればせですけれども、今年度末にセクハラの相談の規定を改定しまして、アウティングなど、LGBTQに関する相談、支援をしっかりと行っていきますということを大学として表明しました。

○馬場委員 皆さん、ご無沙汰しております。公募委員のNEONE代表の馬場航平と申します。

公立中学校に入って、自己理解や目標設定のプログラムを外部講師としてさせていただいております。男女共同参画というテーマにはそぐわないかもしれませんけれども、近況報告をいたします。

今年度は、ありがたいことに6校の中学校に関わらせていただきて、将来、どんなことをしたいのかについて、年間を通して関わりました。2月末に西区の中学校で今年度のキャリア教育の学びを振り返ってという学年発表会を見せていただきました。大人が言った言葉をその子なりに受け取って、自分とは何だろうか、将来はどうしたいのかについて、情報を与えて、かみ砕く時間を作ると、自分たちなりの答えを出すのです。それは、大学生や高校生だからできて、小学生や中学生ができないかというと、そうではないと感じた時間でした。後半のジェンダーのこともううすけれども、あなたはどうしたいのかと問い合わせられたとき、それをそしやくし、言葉にする時間があまりなく、これはこうだと決まり切ったものといいますか、世の中の一般論を伝えると、ああ、そうなのだという感じで何も考えず、気がついたらパワハラだ、セクハラだと訴えてしまうところがあるので、若者に対し、周りに置かれているものや自分のことをそしやくさせてあげる時間が必要だということを感じました。

○山谷委員 お久しぶりです。株式会社クリーンアップ代表の山谷です。

先月、弊社は50周年を迎えました。3月に入って5年前から取り組んでいる健康経営という経産省で進めている認定制度があるのですが、中小企業部門でやっています。目標としていたプライト500という中小企業の全国の上位500社に与えられる名誉なものがあるんですね。昨年は650位から700位の間で、行けるのではないかと思っていたところ、念願がかないまして、今回、上位500社に入りました。今年、全国の中小企業

部門で認定していただいているのが1万9,700社余ですが、北海道内ではブライト500は15社しかありません。そのうち、札幌市内の建設業では弊社だけだったのはびっくりでした。業界を含め、健康にも取り組んでいかなければならないと考えております。

また、現在、えるぼしの認定もいただくように申請しているのですけれども、結果が出るまでに3か月から6か月かかるということでした。くるみんのほうも事業主行動計画年が過ぎてからの提出になるので、提出できるのなら出したいと思っているのですが、こちらもえるぼし以上に混んでいます。要因は、開発局の仕事で、加点要素を得るために認定を取らなければいけないと要綱が変わったもので、皆さんは急いで出しているせいです。先ほど言った健康経営の取組についても、業界別でいくと、中小企業で2万社のうち、最多の4,700社くらいが建設業です。そんなことをやっている中、北海道では随分と少ないので印象的です。

健康も安全も、そして、我々の取り組んでいるジェンダーの関係も、時間とお金をかければそれなりの効果が出るものではなく、地道に長時間かけて取り組んでいかないと成果が出ないという非常に分かりづらいのですが、そんな中でも自分たちのところできることを発信できればと思っております。

どうぞよろしくお願ひいたします。

○山中委員 公募委員の山中です。本業は北大の教員です。

北大は、これから3年間の新規採用について、女性を35%以上採りなさいというルールが適用されました。これはトップダウン的に突如やりなさいとなり、インセンティブも罰則も様子を見てから決めますという状態で、仕組みの導入に問題があると多くの人が感じています。しかし、ボトムの教員間では、(女性教員が)ちょっと少ないのはやっぱり問題だよねという意見もありました。そのことはとても嬉しいことで、私も賛成しました。女性限定公募を地球環境科学研究院でも一、二件行う予定です。

実際には学問分野に依りまして、うちの分野では女性が少ないです。でも、東京大学は、すぐに目をつけ、ぱっと行ってしまったので、そちらにかなりいい人が取られており、かなり苦しいのですが、「やはりやらなければいけないよね、教授の話合いの場に女性がいないのはおかしいよね」ということが自然な形で出たのがとても嬉しく、やるということになりました。これからどうなるかです。

実際、人事選考を何回も受けてきたのですけれども、やはり女性が不利です。この前も、「論文が少ないよね」という話が出たのですが、子ども2人を産んでいるのですから当たり前ではないかとは思うのだけれども、そういう状況なのです。「三十何歳にしては論文がもうちょっと増えたらいいね」という話もあります。今までだと研究者としての分かれ道になる三十代前半の業績が決定的に利くので、そこで不利だったわけですが、今度の女性限定人事でどうなるかは見どころです。私もこっそりと考えながら見ていました。

また、おかげさまで、私が公募委員として選ばれたとき、ウェブマガジンで「小さい空を、のぞいたら。」というタイトルで書かせていただきました。それを見て、一人の学生

が4月から入ってきます。もともとは環境のことをやるということで僕にコンタクトがあったのですが、先生の記事を見つけました、それでぜひともジェンダーのことをやりたいということだったのです。中国の学生で、東ヨーロッパでいろいろと見てきた後、北京に戻ってみたら、ジェンダーが問題なのだと気づいたそうです。それで日本でやってみたいとのことでした。ただ、そのとき、「複合差別といいますか、女性で、かつ、外国人ということがあるので、それに耐えられますか」と彼女に聞きました。ちょうど朝ドラ「虎に翼」があったので、ああいう頃の話をしながら、やりますかという話をしたら、やると決心してくれたので、ここのセンターにご相談させていただきつつ、どういう形でやるかはこれからとなります。

もう一つは、今年も、非常勤講師を依頼し、ジェンダーエクイティー等を考えていかなければいけないという事業をさせていただくことになっております。

私自身も、間違いを犯しながらといいますか、訂正しなければいけないアンコンシャスバイアスがある中でいろいろとトライアルを繰り返しながら過ごしております。

○五十嵐委員 エルプラザ館長の五十嵐です。本日は、ありがとうございます。

どうぞよろしくお願ひいたします。

○事務局（盛田主任） 委員の皆様、ありがとうございました。

<同席する職員の紹介>

札幌市

石崎男女共同参画係長

札幌市男女共同参画センター

高坂市民参画課長、菅原事業担当係長

盛田、阿部、橋本、岩崎、野津

#### ◎連絡事項

○事務局（盛田主任） 続きまして、この会議の目的などについて事務局より説明させていただくところですが、前回にご説明した内容と同様ですので、省略させていただいてもよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（盛田主任） ありがとうございます。

なお、運営協議会設置要綱第5条に基づき、本日、委員の半数以上が出席しておりますことから協議会の開催が成立していることをご報告いたします。

また、設置要綱第6条に基づき、この後の進行も事務局であります男女共同参画センターの盛田が務めさせていただきますが、ご異議はございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○事務局（盛田主任） ありがとうございます。

それでは、議事を進めてまいります。

### 3. 議 事

○事務局（盛田主任） 本日は、令和6年度の施設の管理運営面におけるご報告と令和6年度に実施した事業のご報告並びに令和7年度事業計画書（案）について事務局よりご説明いたします。また、後半には令和7年度に向けた札幌市男女共同参画センターに期待する取組について委員の皆様よりご意見を伺いたいと考えておりますので、ぜひ忌憚のないご発言をいただければと思います。

それでは、札幌エルプラザ公共4施設令和6年度管理運営に関する報告について事務局の高坂よりご報告いたします。

○事務局（高坂市民参画課長） 令和6年度の簡単な共通事業報告と施設利用運営状況、令和7年度の施設利用に関する数値目標についてご報告させていただきます。

まず、全体運営の共通事業についてお話をいたします。

令和6年度は、通常の事業に加え、4施設の共通事業として、北区地域振興課からの受託事業を実施しました。また、人のにぎわいや集いの機会をつくり出すことを目的に市民からご寄附をいただきましたピアノ、ステージ、音響を活用したストリートピアノの事業やそれを使ったコンサートを行いました。さらに、職場のハラスマントを題材にした川柳を募集し、パネル展を実施しております。これらの事業については月1回の開催を目標に取り組んでまいりました。

ピアノをキーワードとする新たな層の利用者が訪れるほか、取引のある企業に川柳作品の応募にご協力をいただきなど、新たなつながりも生まれ、多様な市民が集う施設の一助となる取組とすることができたと思っております。次年度も、寄附していただいた物品を活用した事業を中心に、引き続き柔軟に計画してまいります。

次に、施設利用状況です。

令和6年度利用人数総数ですが、目標値50万9,000人に対し、2月現在で47万6,507人で、目標値の93.6%を既に達成している状況です。残り3万2,409の方に利用していただくと目標達成となることから、昨年度の3月の利用実績である4万1,648名を見ますと、十分に達成可能な数値だと見込んでおります。

次に、今年度の各施設の月別利用人数についてです。2月現在、多くの施設で前年度の実績を既に上回っており、相談事業をメインとする消費者センターを除く三つの施設でそれぞれ増加しています。これは、有料貸室の伸びが主な要因ですが、一昨年度より緩やかに続いている貸室利用の回復傾向が今年度も続いているためです。

次年度の目標値は3万3,000人アップの54万2,000人としております。今年度と同等のおよそ2%程度の利用率アップを目指し、取り組んでまいります。

貸室の利用を促進するため、今月の3月17日から23日までの7日間、地下鉄に貸室の利用促進のためにポスターを掲示しておりました。今回、ポスター掲示というアナログな方法導入しましたが、次回は、来月、SNSを活用し、人が動く時期に情報を出し、幅広い層に効果的に届くのはどのツールなのかについて検証したいと考えております。次年度の目標値達成に向けて勢いがつけられるように継続して広報に取り組んでまいります。

次に、資料のアンケートの報告書をご覧ください。

今期は、12月から1月にかけて、年末年始を挟む約1か月で997人の個人または会を代表する方に回答をいただきました。昨年度にうまく聞き取れなかつたと思われる質問項目をより回答しやすいように調整するなどした上、さらに、適切な期間で調査できたことでより実態に近い結果となつたと考えております。男女共同参画センターに関わる項目では、令和5年度と比較し、全ての項目で「普通」が「よい」に、「よい」が「とてもよい」にスライドする感じで評価が高くなっています。

次に、施設選びの重要度についてご説明します。この形でアンケートを取っているのは2年目ですが、継続して調査を行っており、利用者が求めている項目に大きな変化はなく、窓口職員には親切さを第一に求めるという結果となっています。この親切さを発揮するためには、3番目に重要だとされている知識・理解力が不可欠であることから、いま一度、窓口業務の基本に立ち返り、研さんに努めてまいります。

続いて指標としております総合満足度です。「満足」と「とても満足」のパーセンテージを合算したものを数値としておりまして、男女共同参画センターで満足度が93.22%、札幌エルプラザ公共4施設は93.24%で、いずれも目標値の90%を上回る結果となっております。ちなみに、昨年度は全体で91.4%でしたので、徐々に上がっております。ただ、この結果に満足することなく、次年度からは今年度実績の93%を上回れるよう、また、維持できるように取り組んでまいります。

続きまして、施設管理についてご説明いたします。

札幌市と相談した上で、全体的に施設の老朽化が進んでいることから、ブラインドの修繕を行いました。また、和室の畳みがすり切れるなどの劣化が見られたため、表替えを実施するなど、ふだん手の届いていなかったところなど、中小規模の修繕を行いました。細かな修繕を素早く行えたことも先ほどのアンケートの満足度につながっていたかと思います。次年度は、札幌市主導により、来年度の1年をかけ、全館の照明をLEDに変更する予定です。

最後に、利用料金改定についてです。

4月1日から抽選が始まる小さなお部屋は8月ご利用分、ホールなどの大きな部屋は11月ご利用分から値上げとなっております。予約システムへの新料金適用など、様々な対応がありますが、スムーズに移行できるように努めてまいります。

○事務局（盛田主任）  それでは、管理運営面に関する報告についてご質問やご意見はございませんか。

○馬場委員 単純な疑問です。

利用料金についてですが、ホールA・Bは8月に変更で、ホール全体は11月に変えられるのはどうしてなのでしょうか。

○事務局（高坂市民参画課長） 貸室の種類によって申し込める時期が決まっておりまして、時期が違います。そのため、このようになっております。

○事務局（盛田主任） 他にございませんか。

○馬場委員 アンケートの利用者の年齢についてです。

この会議で聞くのが正しいのかは分かりませんが、10代の利用者が増えたのは情報センターで、昨年の20%に対し、今年は55.04%へと激増したと書かれています。

私は2階の市民活動サポートセンターをよく利用しているのですが、確かに若い人が増えてきたなと思っています。しかし、エルプラザを知っている若い世代の方は多くないといいますか、どうやったら利用してもらえるのだろうと悩んでいました。一方、1階を利用している人もいるということです。

どうやってエルプラザを知っているのか、情報センターの利用が増えた理由はあるのか、そのご意見を基にすれば男女共同参画センターの貸室利用増や団体登録増につながるのではないかと思ったので、分かる範囲で教えていただければうれしいです。

○中園委員 もしかしたら来年度の事業計画のところでお話しされるのだったら、そのときでもよろしいのですけれども、10代の方の利用が増えているということですね。それは、高校生なのか、大学生なのかは分かりますか。例えば、この辺には予備校がすごく多いですね。それで、そういう人たちがいるのかです。あるいは、こういう言い方が正しいかは分かりませんが、支援対象となるような、困り感がある若い人が来ているのか、そうした感触があるのであれば、教えていただきたいと思います。

私も、馬場委員と同じく、何で10代の利用がこんなに増えているのかと考えたのですね。そこで思ったのは喫茶店の料金が高いからではないかと思ったのです。

喫茶店では値上げしていますし、お店も替わっていますよね。昔のことで申し訳ないですけれども、今、20代と30代の娘が2人いまして、その子たちが中高生のときは、コーヒーがただでお代わりできるからということで、ドーナツチェーン店に集まって勉強していたのですね。でも、ドーナツチェーン店といえども結構なお値段かと思います。コロナもあるのでしょうかけれども、若い人の行動様式がどう変わっていて情報センターにたどり着いているのかが読めるのであれば教えていただきたいです。

○事務局（野津主任） 情報センターの若者たちの増加について、利用してくれている若者たちと実際に話してみると友達からここのことを見てという利用が多いかなと感じております。また、中園委員もおっしゃいましたけれども、ここら辺を生活圏内にしている方が勉強できる場所として求めていると感じております。情報センターも長時間の占用利用は推奨していないのですが、譲り合って使用してもらっていますし、短時間であれば利用できるのだということを聞いてきましたということでした。また、友達同士のSNSで

見つけてきたという利用もあります。また、コロナが落ち着いてきて、皆さんが外に出てきている中で増加しているのではないかと分析しております。

○五十嵐委員 2階の環境プラザも親子連れの利用が増えております。皆さんにお話を聞きするとまちなかには自由に遊べる場所が本当にないという話をよく聞きます。

男女共同参画センター、市民活動サポートセンターもそうですが、学校へ行きいろいろな活動を展開しており、それもあって学生が増え出しているということも少しあると思っております。

○事務局（盛田主任） 続きまして、令和6年度の事業報告と令和7年度の事業計画（案）について事務局の菅原よりご説明いたします。

令和6年度事業実施報告と令和7年度事業実施計画をご覧ください。

○事務局（菅原事業係長） 今年度の事業は大きく三つの傾向が見えましたので、その三つのカテゴリーに分けてご説明させていただきます。

最初に、ジェンダー・イシュー事業の中のコミュニティ創出事業で、「僕らはどうやってつながる？男性学から考えるコミュニケーションのありかた」です。

こちらは、男性を対象に行いました。ですから、参加者17名全員が男性です。男性の加害性にフォーカスしたような発信している方を講師にお呼びしました。男性がどうやってジェンダーのことを学んでいくか、男性にとってもジェンダー平等社会は意味がある、ハッピーな社会であるということを発信しました。

毎年、男性向けの事業はやるのですが、集客に苦労しており、今回も残念ながら定員に達しませんでした。男性向けの事業をやる必要性はあり、すごく雑な言い方ですが、男性もすごく多様だと考えています。それに、この事業では、男性の中でもマッチョな男性コミュニティに入りづらい、男らしさのプレッシャーがつらい、そもそも差別がある社会に違和感を持っている男性たちが多く参加してくれました。ですから、講師の話に背中を押されたり、共感を持ったり、ふだんは男性同士で話せないジェンダーの話をすることができるということでつながりを感じられる場になったと思っております。

次に、子ども・若者のためのエンパワーメント事業です。札幌市内の高校の5クラスに対し、家庭科の授業でジェンダーとエクイティをテーマに200名弱に講話を実施しました。これは男の子向けではないのですが、男の子をターゲットに事業内容を考えました。

これは後半の意見交換にもつながりますけれども、家庭科の先生から、男の子たちにジェンダーの話をしてると、ジェンダーはやり過ぎ、ジェンダーはもういいのではないか、ジェンダーに配慮する社会は生きにくい、息苦しいという声があったと事前に聞いていたのです。一方、女子生徒からはジェンダーのことはすごく切実な問題だという声もあり、そのギャップにすごく不安があると聞いていました。

ベースの教材は同じでしたが、反応を見て、マイナーチェンジをしながらやっていきました。ですから、単に啓発して終わりではなく、男の子たちにジェンダー平等をどう伝え

るか、これからリーダーになっていくようなマジョリティ性を持った人がジェンダーの問題をどう考えるか、社会をどうしていきたいのか、民主的な社会をあなたたちはどうつくりていくのか、そういう内容となるように目指しました。ですから、男子に限ったものではないのですけれども、最近のバックラッシュやジェンダー平等に対して違和感を持つ人たちにどう伝えるかを意識的に行ったということです。

次は、「男の子を育てる人のための学習」です。

先の高校で行った事業のアンサー的な内容になるかもしれません、東京の進学校の男子校で性教育やジェンダー教育に力を入れている傾向があり、その取材をされているジャーナリストのおおたとしまささんに来ていただき、話をしてもらいました。内容は、高校の教員の方にインタビュアーになっていただき、おおたとしまささんに質問を問い合わせながら実施しました。

男女共同参画センターに多く来られるのは、今、まさに切実な悩みを抱いている女性ばかりになりがちですが、今年度後半は、男性にとってもジェンダー平等は必要だ、もしくは、男性もその担い手になっていく必要があるということを意識し、男性や男の子のための事業に力を入れました。

とはいって、地域の男女共同参画センターとして、女性のエンパワーメントのための事業も欠かせないということで、引き続き行っています。前回の運営協議会でも、今困っている人への対症療法的な事業と根本的な課題解決の事業が必要だというご意見をいただいたおりましたので、こちらについても引き続き行っております。

これは、毎年行っている女性リーダー養成研修の最終回の成果発表の様子です。企業の女性社員の方を出していただいて、全5回で学びました。そして、最終回には成果発表をしましたが、それを上司の方にも見ていただきました。

女性の従業員の方が研修に出ていく、違う会社の人と交流する場に出ていく機会が少ないこともありますので、横のつながりをつくることで、会社で働く女性たちのエンパワーメントの役割を果たせたと考えています。

次に、男女共同参画団体支援事業です。

「女性支援のはじめの一歩」という初めて行った事業です。

北海道、札幌は女性を支援するNPOは力強い団体がたくさんありますが、人材が不足していたり、少ないリソースの中で質の高い支援をしています。ふだん、そうした団体と一緒に事業を行っておりますので、その方たちをゲストとしてお呼びして、女性支援に関わりたい方たち、これには学生にも多く参加していただいたのですけれども、そういう方たちと学びながら、支援の役割を担えるような人材を育てたいというきっかけとしました。前半は講義で、後半はワークでしたが、ワークの時は話が止まらないぐらいで、当事者性を持っている方が多いからかなと思いました。自分も当事者でありながら支援者となる、その境目は難しいのですけれども、仲間と一緒に学ぶ中で力を取り戻し、支援する側になるというプロセスを今後もつくりたいと思っております。

次に、「若年層のための相談『ガールズトークルーム』」です。

男女共同参画センターでは、2年前までLINE相談を行っており、LINEやSNSでの相談が大分広まってきたしました。しかし、顔を合わせ、関係性をつくりながら女の子たちと関わっていくことが必要だということで実施しております。

写真は、たこ焼きを作っているところです。制服を着ている子がいる一方、学校に通っていない子もいらっしゃるのですけれども、しがらみのない関係性の中で集まってきてくださっています。例えば、妊娠してしまった、子どもがいる、暴力を受けた、そんなときには支援サービスがあるのですけれども、その手前といいますか、ふらっと立ち寄れる、誰かに気軽に相談できるライトな場が予防の面からも必要だと思っております。参加人数はまだ少ないのですけれども、こうした場をどうやって広げていくか、どうやって女の子たちに伝えていくかを今後も考えていきたいと思っております。

最後に、全体を通して政治や社会構造を変えるという事業も多く行いました。

シアターキノとの協働でしたが、選挙に関する映画の記念トークの依頼をいただきました。

これは主催事業での学習会で、「次、選挙がきたらどうする？日常から考えるジェンダーと政治」というものです。若い世代で政治とジェンダーに関わった活動をしている方を講師としてお呼びし、自分が投票するときにどうしようかというところからジェンダーを考える事業を行いました。

次ですが、北海道の女性議員協議会の研修会でもジェンダーのお話をさせていただきました。

また、北海道でクオータ制を考えるQの会という団体の事業の協力や共催を行っております。

こうした政治分野における男女共同参画は、私たちの主催事業もそうですが、周りから一緒に事業をやりましょうということで、協力事業、共催事業、出張講座がすごく増えてきております。

女性に対してのエンパワーメントは、地域の男女共同参画センターとして、引き続き女性に寄り添い、エンパワーメントしていくという役割を果たしていくと同時に、そもそも、こうした構造をどう考えていくか、これをジェンダー主流化と言っていますけれども、その両輪で事業をやっていきたいと思っております。

それらを効果的にするために、今回、政治や政策が多かったということです。市民の声を聞き取るような対話型のイベント、あるいは、データを捉えていく統計など、フレームワークを有効にするための下支えをするような進め方の方法みたいなものを事業化する必要があると思っております。

とはいって、男女共同参画センターとして行っていくものは女性のエンパワーメントのものが中心となります。また、運営協議会では男女共同参画センターとして指定管理業務の事業の話をすることがメインになりますけれども、財團として行っている事業の中では、

ネットワークづくりや対話の場をつくって、指定管理の業務を下支えしているところです。

続きまして、令和7年度事業計画についてご説明いたします。

大きく変わったところはありませんし、枠組みは今年度と変わっておりません。

ただ、レベルアップとして、子ども・若者のためのエンパワーメント事業を入れております。

先ほどお話ししましたとおり、若い世代のコミュニティーづくりをする、あるいは、学校に出張講座をするなどしております。一方、若い女性の向けのテクノロジーを学ぶ、リーダーシップを学ぶというプログラムは東京にはたくさんあるのですが、北海道や札幌にはないという声をよく聞きます。そこで、来年度にはそうした事業を入れたいと思っています。この際、馬場委員にぜひご相談したいと思っています。探究学習の中でジェンダーのことを学びたいという生徒の声を聞くのですけれども、学校外のプログラムが北海道にはそんなになく、地域の課題だと考えています。東京の若い人たちにはいろいろなプログラムがあって、自分が成長したいと思ったときに参加できるプログラムがありますし、国際的な視点を学べるプログラムがあります。そういういたきつかけになるような事業ができるのかと思っております。

また、10の団体への支援です。

先ほどもご説明しましたが、女性団体やNPOと連携して行いました講座を体系化し、入り口の女性支援講座のほか、養成をメインにした講座の二つに分けて実施したいと思っています。

長くなりましたが、事業報告と来年度の計画については以上となります。

なお、お配りしたのは国際女性デーのカードで、女性向けの力強いメッセージが書いてあります。エルプラザの20周年のイベントがあったとき、参加してくださったデザイナーの方がいたのです。その方の作品を見たとき、これを国際女性デーにつくってもらいたかったなと思っていたので、それが1年越しに実現しました。情報センターで展示しており、300枚くらい配りました。好きなメッセージのものや絵のものを選択することもエンパワーメントには必要なことだと思っておりますので、そのように持っていってもらいました。

○事務局（盛田主任） 説明にありました事業報告、事業計画（案）についてご質問やご意見はございませんか。

○馬場委員 事業実施計画書のレベルアップのものについてです。

男女共同参画センター以外のところで言うと、2階の市民活動サポートセンターではN活という枠組で学校と市民活動団体、NPOがどう協働できるのか、共創事業をつくれるのかをテーマに話しています。そちらでも課題だなと思うのは学校の先生にどうやって情報にアクセスさせるかで、そこが結構難しいと思っています。

市民活動サポートセンターにおいては、学校の先生が来て、市民活動団体やNPO団体が伝えたいこととマッチングさせることを考え、やっております。ただ、学校の先生に来

ていただけないところの思いが学校の現場に届いていかないのが課題でして、次年度にどうするか、担当の方と話しています。男女共同参画センターでも同じようなことがあって、どうやって学校にアクセスするかはすごく重要なかなと思っています。

学外の活動があったとしても、例えば、自分がメインで行っているのは中学校ですが、中学生は親がついてきたり、親から勧められて参加することが結構多いのですね。そのとき、親や学校の先生が背中を押してくれると外に出ていきやすいけれども、チラシを見つけ、何かをエルプラザというところでやっているのだということだけではまだ行きにくいのです。1階の情報センターみたく友達に勧められ、一緒に行こうよと言われると行けるというところがあると思うのです。学外の活動が少ないから自分の興味や得意を見つけにくいということがある一方、そうした情報にどのように学校の先生にアクセスしてもらうかはすごく重要なかなと感じました。

また、名門男子校が性教育に力を入れ始めているというものについてです。

私も出席しましたが、たまたま同じテーブルだった方に市立中学校の学校の先生がいたのですね。そのような方にジェンダーについて生で聞いていただけけると、ここのセンターの職員がわざわざ出前講座で行かなくても、それぞれの学校の道徳や総合学習の時間にエッセンスとして話していただいて、素地ができた状態でもう少し踏み込んだ内容を、本来伝えたいジェンダーエクイティのこと、あるいは、別の文脈のことを話せるようになるのかなと思います。当日に参加していただけないのであれば、アーカイブなど、学校の先生方が見られるものをつくるといいのかなと思いました。

学校は閉鎖的な空間だからこそ、ちょっと情報が入ると流れが変わっていくところがあるのかなと思いました。そして、学外の活動をつくっていく、そこに当事者の先生たちを巻き込むことが重要かなと思います。

○事務局（菅原事業係長） アーカイブはいいなと思いましたので、考えたいなと思いました。

○山中委員 今の馬場委員の話で思い出したことがあります。

私はあちらこちらの高校とつながっているのですが、ここをどう紹介するか、この事業をどう紹介するかは結構難しく、どうしても個人的なつながりで、菅原さんとなってしまう傾向があるのですね。でも、菅原さんは忙しいし、これを頼んでいいものかという感じで僕が止めてしまっていたのではないかという気がします。

ウェブページでもいいので、高校でジェンダーやエクイティのことをやりたいという相談を受け入れますというページがあると、例えば、私も講演をしぇっちゅう宣伝しておりますので、先生方に対して、あるいは、高校生にやるときに対し、こういうページがあるよと紹介できるとスムーズにつながるかなと思いました。

○事務局（菅原事業係長） ありがとうございます。

○事務局（盛田主任） ほかにご質問やご意見はございませんか。

○中園委員 先ほどご説明のあった高校で行った事業ですが、おこなって学生は変わった

のですか。

○事務局（菅原事業係長） 1回では変わらないなと思いました。ただ、最初にアンケートっぽいチェックリストをつくったのですね。ジェンダー平等な社会に対して自分が感じているものに近いものはどれですかという問い合わせをつくり、日本は遅れているから緊急の課題である、自分にとっては切実だ、やり過ぎだ、息苦しいなど、幾つか書いてもらい、どういうタイプでどういう価値観の人かを見ました。また、ワークも行ったのですが、難しいなという経験をしてくれたと思うのです。

ですから、がらっと変わっていないとは思っています。でも、クオータ制はあっていいのかどうかについてグループで話してもらったのですけれども、うわっ、来た、それを話すのは嫌だという感じでした。それはすごく難しい問題だったからなのです。でも、多くの生徒は、本当はないほうがいいけれども、今の日本の状況を考えたらしようがないのかなという子もおりましたし、女子からはそれで入ったと思われるのが嫌だなど、いろいろな意見が出ました。

最後にアンケートも取ったのですが、知らなくて恥ずかしかったという感想が多かったです。一方、抵抗感を持った人もいたのです。それもいいなと思いました。本当は委員の言うように、がらっと変えるといいますか、すごく効果的なメッセージを言いたかったのですけれども、難しいので、それを探っていっている状況です。

○中園委員 私が授業でやっていることは脅しです。法律でこう決まっているのだから、特に男子は管理職になることが予定されているのだから、これを知らないで、男だから、女だから、あるいは、育児休暇を取る男に対し、おまえは何を言っているのだと言ったら一発でアウトだからと言います。

高校までにそういうことをちゃんと教えていないということもあるのですけれども、知らないで社会に出るのです。新人のうちはいいですよ。上の方が教えてくれるから、そのとおりに動けばいいのですけれども、中間管理職や職場のトップになったときです。法律は変わるわけです。それに、労働局のホームページなどに超丁寧に書いてあるから、それを見れば分かりますと言って、世の中の流れに取り残されないようにしないと駄目だという脅しをかけています。

○事務局（菅原事業係長） 脅しが効く関係性もありますよね。本当に歩みの遅さにいらっしゃるのだけれども、優しく伝えなければならない関係性や文脈の場合もあり、対象に合わせ、あるいは、関係性をつくりながら行う感じです。

ある大学では、年に1回、300人に対してなので、何もできません。アンケートを行い、こういう結果だったとなつても、次の年の学生さんに対してどんなことができるだろうかということくらいしか考えられません。地道な歩みの遅い取組になりますが、その中でできることを探している感じです。

引き続きご相談させてください。

○山中委員 今の文脈によると、市内のある高校で6月くらいに1年生を前に講演してい

るのですけれども、年によってはジェンダーの話をすごく多くしたり減らしたりします。そして、12月頃に個人の探究のポスター発表があるのですが、ジェンダーの話を扱ったときと相関がかなりあるという印象を持っています。

無邪気に質問してくれる人がいて、先生はどのSDGsの目標が日本で足りないと思いますかと聞かれたら、しめしめと思い、ジェンダーですと言います。こうして強力に推すわけです。そういうことを経験すると、高校1年生の子の中に何かが生まれ、社会課題でSDGsの何番を扱おうかというときにそれが増えてくれるといううれしいことがあります。むしろ、今回依頼されたのはちょっと違うかなということでジェンダーのことを減らしたら、そうしたもののが全く見えないので、行動までは行かないけれども、気づきを与えるくらいのところで1回で行くこともあるのだろうなと思っています。

○事務局（盛田主任）　ありがとうございました。

続きまして、意見交換に入らせていただきたいと思います。

まず初めに、今回のテーマとどのような意見をお伺いしたいかを含めまして、事業主任の阿部よりご説明いたします。

○事務局（阿部主任）

本日の意見交換会では、令和7年度に向けた札幌市男女共同参画センターに期待する取組について皆様と意見を交わしたいと思っております。

近年、ジェンダー平等に対する意識が社会全体で高まりを見せています。一方で、ジェンダーをめぐる議論は自身の価値観や育った環境からの影響が大きいことから対立や分断がとても起きやすい分野でもあります。また、私たちも実際に事業を行っていく中で強い反対意見なども増加していると感じております。このような流れの中、男女共同参画センターは社会情勢をより敏感に察知して事業に反映していくことが必要だと考えております。

本日は、令和7年度に向けてセンターが果たすべき役割や新たに取り組むべきことについて皆様から率直な意見を聞かせていただければと思っております。みなさまの専門的な分野から皆様の意見を伺い、今後の方向性を探ってまいりたいと思っておりますので、どうぞ忌憚のないご意見をいただければと思います。

○片山委員 先ほど、菅原係長、馬場委員、山中委員がお話しされていることからいろいろと考えたのですけれども、私にも高校3年生の次男がいるのですね。この前、ご飯を食べながらアファーマティブ・アクションの話をしたのです。最近、国立大学で女性枠を設けているところが増えていて、いいよねという話をしたら、ずるいと言うのです。彼は進学校に行っているのですが、彼の中では、平等にしてほしい、何なら女子のほうが勉強できることもある、その中で一緒にやっているのに女性枠が設けられてずるいという話をしたのです。でも、実際に進学率は女性のほうが低く、国立大学になると教授は7%くらいしかいないのだよと言ったのですけれども、努力が足りないからなど、いろいろと言うのです。それでだんだんと熱くなってきたので、やめたのですけれども、その繰り返しです。

それも踏まえ、高校の話を聞いていますと、若いときにそういうことに触れる機会がな

いのです。それに、日本は性教育をきちんとしていないですよね。でも、性教育とジェンダーは一致しているものだと思っていて、包括的性教育も話題になっていますけれども、それも含め、公平性と平等は違うのだと言うのです。

リンゴを取るのに段を使わなければいけない人がいて、ハンディを埋めることをすることがイクオリティーなのだという話をするのですけれども、それすら高校で聞いていないから、男女共同参画センターがされている事業が重要だなと思っています。

橋本主任がされているユースのジェンダーコレクティブ北海道です。同じように若い方でジェンダーの話をすると周りが嫌がる、その話はしないほうがいいと言われ、だんだんと言えなくなってくるということがあります。でも、みんなも気になっていると思いますし、今の世の中はおかしいと思っていると思うのです。個人的なことは政治的なことだと分かっていないので、自分の問題だと思ってしまい、解決できないまま、もやもやとしているのです。ですから、若い子たちに種をまく事業をどんどんやってほしいなと思います。それは、先ほどの高校だけではなく、いろいろなところでやってみると、私の息子の認識も変わらぬのかなと思いました。

また、今、女性記者もすごく増えていて、子育てと両立しながらやっているのですね。でも、ハードルはまだ高く、キャリアアップを諦めなければいけないこともあります。しかし、関心を持っていますし、どんどん書きたいという意欲もあるので、それを後押しするだけだ、次の世代につなげるだけだと思っているので、取材に行かせますので、頑張ってください。

○事務局（阿部主任）　若い世代に対するアプローチの話をいただきました。

馬場委員、日頃から若い世代の方に接する機会が多いと思うのですけれども、ジェンダーに対する若い世代の意識や課題感があれば、私たちに期待する取組も含め、お話をいただければと思います。

○馬場委員　このテーマをいただいたとき、すごく思ったのは、改めてジェンダーとは何だろうか、すごく難しいなと思ったのです。今、片山委員に言っていただいたように包括的性教育を北海道の中でもちょっとずつやっていて、特に旭川市なんかがそうです。その一方、学校で性教育には歯止め規定があって、学校では教え切れないといいますか、腫れ物に触るような感じになっていますし、本当は大事だけれども、学校教育の中では扱わないとなっています。家庭の中で教えたけれども、親子関係では教えにくいというとき、果たして学校でジェンダーとは何だと伝えるのか、まだピンときていないところがあると感じています。

子どもたちがジェンダーという文脈でどんなことに興味があるかというと、とっつきやすいのはL G B T Qの話です。私は、市内のある中学校・高校で学びのサポーターといいまして、別室登校の子たちの支援をやっているのですね。

先日、ポスターセッションということで、5年生や6年生がメインになって、探究のテーマの発表会があったのですが、1割くらいはL G B T Qや女性としての自分らしさをど

うやって見せていくかをテーマにしていて、ジェンダーエクイティーというより、性の多様性について、子どもたちも生きづらさを感じていると分かったのです。でも、社会に出ていくと、先ほど片山委員におっしゃっていただいたように、管理職に女性がなかなかいないわけで、現実と自分たちの学校生活との乖離といいますか、現実味があまりないので。現状、私は女性であり、女性として生きているということと心の不一致で生きづらさを感じている子がいるので、子どもとしてはLGBTQをテーマにすると思うのです。

そうしたことも含め、ジェンダーについて子どもたちに対してどう伝えるのがいいのかは改めて皆さんからご意見をいただけたらうれしいなと思いながら聞いていました。

○事務局（阿部主任） 今の馬場委員のご意見に対して何かありませんか。

○中園委員 私もジェンダーのことを授業でやっています。前にも皆さんにお話ししたと思うのですけれども、今、馬場委員が言ってくれたように、今の学生がジェンダーといつて思いつくのはLGBTQなのですよ。勉強したいことは、私がやっているような男女の賃金格差や女性の貧困ではなく、LGBTQだということです。

特に、私の大学は男子が多いからかもしれませんし、これは私の主観ですけれども、女性差別というより、見た目、あるいは、生まれた時の性と違う性で生きる、あるいは、男性が男性を愛しているということのほうが近しい存在なのか、何か、シンパシーを感じているのではないかと、2年間、ゼミをやってきて感じるようになりました。自分の専門ではないところでゼミを展開していて、自分も勉強しなければならないので、すごく大変なのです。

ジェンダーとは何なのかといったとき、性差別だと言うとします。それに、昭和の時代には男と女の違いだ、女が虐げられているではないですかという話をすればよかったですすけれども、今、女性も多様化しているわけです。バリキャリというのも昭和の言葉ですけれども、頑張って管理職になって、高給取りになって、社会を引っ張っていきますという人もいますし、生活保護以下の賃金で働いている方もすごくいらっしゃるわけです。その上で、このお題をもらったとき、結局、何がしたいのかというのが正直な感想でした。

女性は女性で多様化しているのです。もちろん、男性も多様化していて、マッチョ思考の男性もいますし、先ほど言ったとおり、男性なりの弱さを表現したいと思っている人もいますし、LGBTQで悩んでいる男性もいます。その中でジェンダーと言われてもあまりにも大き過ぎるのです。

その中で私が思うのは、返す刀で申し訳ないのですけれども、ジェンダーというとき、このセンターで何をするのか、何が得意なのかを自己分析するといいますか、私たちがどうこう言うことではないように思うのです。

例えば、来年度の事業計画を見ますと、タイプ分けをしていましたけれども、全部が全部できるわけではないですよね。それに、プラットフォーム機能を持つことが正しい理念としたとき、そこまで含めるのか、このテーマを見たとき、すごく悩みました。

一つの得意分野は、男性向け、女性向けもそうですが、講演です。エンパワーメントと

いう言葉に置き換えてもいいと思いますが、それを強化することですね。先ほどホームページの中で高校生向けのページをつくったらどうかという話がありましたが、外からは何でも菅原係長がやっていると見えるのです。NHKの番組を見ていますが、地方まで行き、やっていますよね。そういうものを菅原係長ではない人ができる仕組みが必要だと思うのです。それは、今いる若い職員をどういう育成するのかもそうです。

私も関わっていますけれども、地方の自治体にも男女共同参画の担当部署が必ずありますよね。でも、すごく人材不足なのです。何も分からぬ人で、男女共同参画では何をやつたらいいのですかという感じです。それを教えるのが私の仕事なのかと思います。そんな中、いろいろと言うのですが、すごく疲れるのです。

今の話はどうでもいいのですけれども、エンパワーメントや講演会のコンテンツを強化していくという戦略はあるのではないかと思っています。そして、第2の菅原ではなくてよくて、別キャラでもいいのですけれども、違う分野はこの人という人材が育てばいいのかなと思います。

これだけしゃべっておいて質問ですけれども、反対意見が来ているということでしたよね。それはどういうことですか。

○事務局（阿部主任） 何か実害がということではなく、社会での空気を感じるということです。あるいは、実際に事業をやったとき、意見を言われることが増えてきたかなという感じです。

最近、特に多いのは、私たちはフェイスブックにイベントページを作りて広報しているのですけれども、そこに広告を出すと、こんなものは必要ではないか、やり過ぎだという意見をつけられることがすごく増えてきています。フェイスブックはいろいろな人がいろいろなことを言う場ではあるのですけれども、そういう世の中の雰囲気を感じているということです。

○中園委員 フェイスブックで集客を見込んでいるのですか。

○事務局（阿部主任） そうですね。一定数の集客はあります。

○中園委員 では、やめるということにはならないのですね。

○事務局（阿部主任） 一定程度の集客があるので、急に全てをやめることは検討していません。

○山中委員 違う切り口から言います。

やっぱり、アンコンシャスバイアスといいますか、刷り込まれているものが教育ではたくさんあるのです。例えば、高校の先生の男女比は24%で、あまりにも低いのです。一番多いところで45%くらいです。小学校の教員を見ますと50%くらいになっているのです。でも、上の偉い人になると男性が多いと思うのは、ジェンダーの格差ではなく、世代間格差だと思われていると刷り込まれていることがあるのです。

若い人はといいますと、グレタ・トゥーンベリさんの言う気候正義ですよね。若い人に期待するのは、現世代が問題をつくったのに次世代の人に解決を任せるのか、犯罪者では

なく、被害者が解決するのかということです。私の友人から「2日前くらいにジェンダー学をやっている娘から責められました。あなたがちゃんとしないから私が今こんなにわめかなければいけないのよ」と聞かされ、おお、なるほどと思いました。

まさに、その点が気をつけなければいけないところで、やはり、若い人が(未来への)希望です。ただ、マスメディアで若い人がやっていることは取り扱いやすいのだけれども、そのとき、大人の人も一緒にやっていることをチェックするのがとても重要だと思います。

もう一つ、この前、「子どもをいい学校に、いい職業に、いい将来にしたい」という母親でも「女の子だから大学に行かなくてもいいのよ」と平然と言ってしまう人たちがまだたくさんいることに啞然としたのです。要するに、中核世代が語りかけることで、若い世代に刷り込まれていると言うのです。そして、そのときの(刷り込みを指摘する)説明としては、こちら側も客観的にエビデンスベースで言わなければならず、世界ではこうだ、フィンランドではこうだと言うような視点を持つたらいいかなと思います。そして、社会変革の、教育をどうつくるかを考えるときに一番言いやすかったのは気候変動です。これは世界的に認められていますから、これをやれと言うのはそんなにおかしなことではありません。その次に何があるかというとジェンダーイクエティーではないかと思っていて、社会をよりよくしたいのなら、ジェンダーイクエティーが次の錦の御旗になるはずだと思っています。そういうことを考えると、L G B T Qもあるのですけれども、その前に男女のことをやらなければいけないのではないかと思っています。

マイノリティーも考えなければいけないので、誰一人取り残さないというインクルーシブのことやりたいとは思っています。

次が提案です。これは青田委員に関係することになるかもしれません、私は札幌市環境審議会の会長をやっていて、環境についていろいろなことをやっています。そこで話をしているのですが、「対話の文化をつくろう」ということで力を結構入れています。要するに、今の社会でC O<sub>2</sub>を減らそうでは行き詰まるので、これ以上減らせないので、C O<sub>2</sub>を出さない社会へと新たにつくり変えないといけないということです。そこはトランスフォーミング・アワー・ワールド(Transforming our world)というS D G sを決めた文章のタイトル「我々の世界を変革する」とあるように、それを札幌市からできないかという考え方のもと、環境局ではいろいろな事業をやっています。ユースでいろいろとやっているような対話の場があるのですが、それと似たような仕組みで、ジェンダーのことについても対話の場をつくろうという感じでリエゾンして一緒にやってはどうかと考えています。

結局、そこで出てくるのは縦割りのところがあるので、どうしても気候変動を言っているのですけれども、環境局の担当者の気持ちとしては社会課題を全部扱いたいという気持ちを持っているのです。お役所としては気候変動等ということで「等」の字をつけるわけですけれども、そうして社会課題を話せる対話の仕組みをつくり、特にユースに経験してもらおうという仕組みがあって、高校生のファシリテーターをつくっているわけです。そこで話をすれば、ジェンダーの話やほかの社会課題も出てくるので、そことリエゾンする、

一緒にやるということを考えると力を持つかなと思います。

さらに、一部の人は気づき始めていて、その後は合意形成の話をしないと社会は変わらないと気づき始めたので、民主主義や政治の場のことをちゃんとやらないとしようがないよね、政党政治の話ではなく、いろいろとつくっていきましょうということまで考え始めている人もいるのです。ですから、今回のことについても政治分野の話もあったほうがいいことだと思うので、事業展開のときに環境や気候変動とくっつけると、二人三脚といいますか、シナジーエフェクトがあると思うということで、それを提案します。

○青田委員 我々市役所では縦割りのことが言われます。また、環境分野とは親和性を持っていなかったので、そこと一緒にという発想はありませんでした。でも、今、ご提案をいただきましたので、環境の担当とそういう話ができるかどうか、新年度に向けて検討したいと思います。

○事務局（阿部主任） それでは、山谷委員、ご意見をお願いします。

○山谷委員 今回、事前に意見交換会テーマを見て、来たなと思いました。それは、求めていることへの解決策を出すことが非常に難しいなと感じたということです。その上で、何日か、自分なりに考えていたのですけれども、即効性のあるものや解決できる取組は結果としてはないのかなと思いました。

ただ、冒頭にお話しさせていただいたように、安全や健康と同じように、時間とお金を幾ら積み込んでもそれに見合った結果が出るものではない、だからといって手を抜いていいものではないということです。ですから、必要だと思うことを根気強く続けることが大事かなと思います。

なお、ジェンダーについては世界を見ても日本が進んでいないという問題点は今までの歴史と環境、それから、家庭から引き継がれるもの、授業にあるなしの知識の不足で、ジェンダーのことが世の中にあふれ、当たり前になるくらい時間が経過すると、問題意識ではなく、当たり前に変わると思います。そこまでのその変化をどうつけていくかが大事かだと考えます。そうすると、小学校からの教育の中にジェンダーの科目を入れて、世の中のメディアでも普通にあふれている状況をつくることが大事ではないかと感じました。

男女共同参画については法で1992年に制定され、それから四半世紀が過ぎますけれども、ようやく政府でも大手企業でも取り組み始めていますよね。でも、今盛んに言われているダイバーシティー、エクイティ・アンド・インクルージョンです。恐らく、中小企業の経営者、そして、そこで働く人たちは何だぐらいにしか捉えていないと思います。でも、興味があって、そういう情報を目にして勉強するわけですけれども、出ている情報が少な過ぎるのです。

特に、建設業は、男しかいないというのが当たり前で、喫煙率も高いのです。それを改善していく中で経営者自体が、要は団体のトップの意識が変わらないと絶対に変わりません。それでも、国が変わり始めたのが大きいですし、それに大手企業が追随していき、だんだん波及していくのかなと思います。次に、300万社ほどあると言われる中小企業、

小規模事業者の方々がどう変わつていけるかです。でも、そこは企業でして、大人の方々が多いので、変わるために、先ほど言ったように、代表者が変わらるようなアプローチが必要だと思います。そして、それ以前に、子どもの教育にカリキュラムとして多く入れ、長くやることにより、将来、この問題をいい方向に展開させることが重要ではないかと思います。

30年、自社でいろいろな改革をしてきた中で結構驚くこともあります。ちょっと前までは大人でも公平性と平等と均一の違いを分かっていない方が多かったです。でも、学んで、理解すると、考え方が180度変わるくらい伸びていく人がすごくいます。ですから、もともとの性の違いによるものは別として、それ以外のものは変えられるものだと思っています。親から受け継いだもの、その会社で受け継がれているものを変えていく意識を広げていくことに尽きるのかなというのが自分なりの感じです。

トランプ政権がアメリカでということがありますよね。昔、彼がそんなに声高らかに言つていなかつたことわけですが、男女平等やジェンダーの問題なんてと言つていますよね。彼は接戦を制した中で、宗教団体のことがどうしてもあるからだと思います。本人がどう思つてゐるかは分かりませんけれども、政治家は大変だと感じました。ただ、3億何千人もいる国で世界的にドルが蔓延し、発言力のある人が選挙のことで自分の本心と反していることを言って、その影響が世界に広がり、それに振り回されることがないよう、正しいことは正しいと言えることをしっかりと見詰め、継続できることが重要だと思いますし、日本のジェンダーギャップの改善を自分なりにやれたらなと思います。

○事務局（阿部主任） 残り5分くらいになるのですけれども、ほかにご意見ある方いますか。

○馬場委員 次年度の事業計画を見たとき、ジェンダーの課題に関心のある市民がより学びを深められる講演やセミナーを実施することができます。これだけではないと思いますし、一概に言えることではないのですけれども、報告であった高校の生徒みたく、ジェンダーとは何かを考えていない人が圧倒的に多いから、会社、学校、家庭の中で意識せずにといいますか、その人たちにとっては無意識といいますか、ふだんどうおり過ごしてて、日常の当たり前になってしまっているから、言われてみたら、確かに女性管理職や女性社員が少ないよねと振り返られるかもしれませんけれども、どうしたらいいかが分からぬのです。そして、日常の喧騒とする日々の中、落ち着いて考えることができないこともあります。だから、ジェンダーとは何だろうということもそうですし、ジェンダーのことを考えていない、取り組めていないのは悪であるということがどんと出されると、分かっていても受け止め難いといいますか、今まで知らなかつた自分を否定されているといいますか、俺って駄目なやつだなど受け止めてしまうと、すっと入つてこないところもあるのかなと思ったのですね。

そこで、男女共同参画ができたり、家庭の中で男女のパワーバランスがしっかりと担保されておらず、どんな社会ができるのかのイメージがつかなかつたりすると、ただ単に

管理職を増やせばいいのでしょうかという話になってしまいそうです。そんな中、家族の楽しそうな写真を展示している裏側に本音が見えてきて、社会の中での生きづらさやもどかしさが出てくると、自分の周りにあるこれは何だろうを投げかけて、その一つのテーマとしてジェンダーの不平等性といいますか、女性が社会復帰しにくい現状がある、あるいは、女性の晩婚化が進んでいるのは家庭や社会の中での立場など、育休や産休を取りにくくなど、いろいろなことが介在しているはずなのです。そこで、きらきらしている、楽しそう、こんな生活をしたいというすごく楽しそうな展覧会だけれども、裏には若干どろどろした心の声が見えてくると、入り口としてはすてきだなというところから、自分の生活や周りをかいま見て、確かにあの人はこれに困っているなど立ち返れる空間があると、あなたは知らないのは駄目ですよ、今からでも遅くないですよとどんとぶつけることにならず、どうしていきたいのかと問いかけられそうで、それがあるといいかなと思います。

○山谷委員 会社で自分が使っている手法ですけれども、例えば、ハラスメントが問題になっていますよね。きりがないくらい出ていますけれども、弊社では過去にも今もありますけれども、それをそのまま放置するわけにはいかず、どうしたら減らせるのかを悩んで、ほかでやっていた方法を使っていました。大手企業もやっていましたと聞いて、自分たちもまねたのが最初ですが、人というのは知ると知ったことに対して比較したがるのです。その性質を利用して、どんどん知ってもらったのです。

例えば、セクハラはどういうものなのか、何で問題なのか、そうなったときにどうなってしまうのか、自分では気づかないでやっている人が意外と多くて、そういうことをまずは知ってもらう、賢くなつてもらう、それを知ってもらい、比較するのです。ジェンダーについて反対意見が出てくるのは、それを知ったことで、そうであることとそうではないことが生まれたことによるアレルギー反応の一つで、前進していると捉え、広く深く発信し続けるといいのかなと思います。

さきのことで弊社のハラスメント問題の数も減りましたし、女性社員が増えることで男性だけのときよりもすごく和やかになりました。アレルギー反応を少なくしながら時間をかけていろいろと知っていただく中で賢くなつていただくということができたらと思いました。

○山中委員 馬場委員の話を聞いて少し考えたのですけれども、環境の問題に関し、CO<sub>2</sub>をどう減らすかというとき、楽しみをつくるということがありました。社会課題など、いろいろなことをやるとき、わざわざ苦しいのにそうしたい人はいないから、楽しくないと駄目なのです。景品をあげるなんということでは駄目で、本質的な楽しいものとは何かを考えるといいのかもしれません。

地域の過疎化も同じです。地域課題を消したらすばらしい地域に戻るなんていうことはなく、中立になるだけです。地域課題を考えるとき、それができる面白い人を域外から連れてくる、関心を持ってもらうということが大切なのです。これについては、関係性人口やよそ者など、いろいろと言い方はあるのですけれども、地域で楽しいことをやっている

となぜか地域課題が消えていくようにするのです。最近有名になった四国の神山町もそうです。

ですから、ジェンダーの問題で本質的にこれはいいなと思うものを隣に置いておくといいのですけれども、すぐさま思いつきません。

○中園委員　自分が言ったことを考えていたのですけれども、10代に力を入れていくのは正しいというか、賛同いたしますけれども、若者活動センターがありますよね。そことのすみ分けといいますか、連携をどう考えていらっしゃるのかが一つです。

また、先ほど勉強でここを利用しに来る学生が多いということだったので、そんなに困り感がある若者がここに来ているという雰囲気ではないのかなと推測しました。でも、そういう人が来ないとも限らないですよね。まして、今の若い人はです。それから、さきほどの高校には本当に生活保護の子は本当にいないのですか。そこで生活保護の女の子がどうのこうのという話ををしていいのかと一瞬思いました。これは余計な話でした。

でも、先ほど私が言ったことと重なるのですけれども、若者支援や貧困支援をやっているところとのすみ分けや連携を整理したほうがいいのかなと思います。親しくなってくると表立って見えないです。例えば、今、貧困だからといってぼろぼろのジャージーを着ていたり臭いがしたりという子はいませんよね。見た目は小ぎれいですよね。そういう方が来て、親しくなる中でそういう話がぽつと出たとき、大変だったねで終わるのではなく、次のところへつなぐことがすごく大事だと思いますので、そういう準備はしておいたほうがいいのかなと心配しました。

○事務局（橋本主任）　若者支援施設との連携やすみ分けについてですが、先ほど菅原からご説明した事業の中でガールズトークルームのことがありました、昨年度までは若者支援施設という若者が集まるところの部屋を借りていたのです。しかし、今年度からは、連携事業ということで、若者支援施設のユースワーカーも入って実施しました。

若者支援施設でも悩みを抱えた若者が来ていたということはあったのですけれども、ガールズトークルームはスタッフも女性で、そこに女の子が集まるので、若者支援施設ではちょっと話しづらい話題についてもガールズトークルームでは話せるなど、連携は今年度進められたと思っております。

また、支援となったとき、こういうことで悩んでいる子がいるということで私どものセンターにつないでもらい、私たちのやっている女性支援という枠組みから話をして、先につなぐ必要があれば、また別の専門機関につなぐということもやっているのですけれども、それに加えて、ほかにどんな連携ができるか、引き続き考えていく必要があると思っております。

○中園委員　連携というとき、窓口で相談を受ける人は同じではないですね。誰でも受けられるようにすることが必要かと思います。生活保護の窓口でも言われているけれども、厚労省の目的でやっているのです。職人芸にならないで、職員全体のレベルアップと働き方改革をはじめ、個人にかかわらず、誰に話しても同じ答えを返してもらえることを期待

します。

○事務局（阿部主任） 皆様、貴重な意見をいただきまして、ありがとうございました。

来年度もたくさんの事業をや実施していくますが、皆さんのお意見を聞いて、戦略的にやっていく、必要な層にアプローチしていくことの重要性を感じました。それを踏まえて次年度も引き続き実施してまいります。

以上をもちまして意見交換を終了いたします。

ありがとうございました。

○事務局（盛田主任） 委員の皆様、たくさんのご意見をありがとうございました。

いただいたご意見などは議事録としてまとめさせていただき、男女共同参画センターのホームページに掲載させていただきます。詳細については改めてお知らせをいたしますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 5. その他の

○事務局（盛田主任） 最後に、札幌市男女共同参画センターの指定管理者である公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会市民参画部長、札幌エルプラザ公共4施設館長の五十嵐よりご挨拶を申し上げます。

○五十嵐札幌エルプラザ公共4施設館長 皆様、本日もありがとうございました。

2年間、本当にありがとうございました。

## 5. 閉会

○事務局（盛田主任） 以上をもちまして令和6年度第2回札幌市男女共同参画センター運営協議会を終了いたします。

委員の皆様、本日はご参加をいただきまして、ありがとうございました。

以上